

二十 字音かな遣ひあらたまれり

といふを聞きて(昭和十七年九月)

吉川幸次郎

『国語国文』(昭和十七年九月号)に発表されたもので、昭

和十七年七月に国語審議会が「新字音仮名遣表」を答申したことに関連して、古典を尊重することと現代の仮名遣いの問題とは別の問題であることなどを述べたもの。吉川幸次郎(一九〇四〜一九七九)は中国文学者で、京都大学教授。国語審議会委員。

おのれ唐のまなびに心よせてより、開きて読むも筆とりて書くもたゞ唐ふみばかりにて、十年あまりを経しほどに、みくにことのうへなるくさぐさの掟、みないとおろそかになりぬるうちにも、唐もじのとなへざまとて、先づ世の人の定めたまへる字音仮名遣ひといへるわざは、わが名幸次郎といへるさへ、いかゞしたゞむべきか定かならずなりぬ、一とせ神田喜一郎ぬしの父君みまかり給ひける折、おのれは東京へまゐるべきことあり、したしくとぶらひまゐらせむすべもなきまゝに、駅より電報うちてやるに、ヨシカハとまでは心得

つ、また郎の字は唐音 lang にて陽唐の類なれば、ラウなるに定まれり、さて幸の字はいかゞあるべき、唐音は shing にして庚清の類なり、陽唐の類にはあらざれば、おほかたコウならむと、おしはかりにてしたゞめつ、程へて字書どもあらためぬるに、庚清の類もみなア段の仮名なりければ、始めておのが無学を恥ぢけり、

かくおろかなるおのれにはあれど、古き仮名づかひ改まりぬると聞けば、古きものゝすたりゆくを惜しむ心あり、またかくなれるを便りよしと思ふ方もあり、おほかたは便りよしとおもふかた多し、そはひたぶるにおのれ無学なるゆゑにはあらず、さ思ふ仔細べつにあり、そも仮名づかひといふは、いにしへのとなへざまを、そのまゝに仮名にうつしたるなるべし、さればこの掟を守るは、いとゆかしきに似たれども、今の言葉の古と異なるは、ひとりとなへざまのみにあらず、もろくの言葉のさま皆すでにうつれり、テフとなへしをチヨウとなへ、ホンタウとなへしをホントウとなふるは、となへざまのうつりしなり、コテフといひしをテフテフといひ、ムベといひゲニといひしをホントウニといふは、言葉のうつれるなり、かくよろづのさま古とはうつれるに、たゞ書きざまのみ古のとなへざまをうつすは、さまでよしあることゝもおほえず、ことにこのわざわらべたちに授けんには、便りあしきかた多かりなんかし、わらべたちは古の言葉

のさまも知らず、またいにしへの言の葉いと異なれりとも
わきまへざるに、などこのわざの心にしみなむや、まして今
の世の言の葉は、さらにまたおしうつりて、チヨウチヨとい
ひホントニといふ、はかなきさとびごとにはあれど、はかなき
まゝにあはれなるふしあるを、古きかなづかひ守るのみにて
は、うつすべきすべなからむ、おのれ新らしきかなづかひ便
りよしと思ふは、かゝるふしあればなり、かの西洋のふみの
つよりさまも、となへさまのごとくにはあらねば、となへざ
まのごとしたゝむるはあしといふは、かへりて大和ごころに
あらずかし、

新らしき仮名づかひにては唐音まなぶにたよりあしといふ
人あらむ、されどこはさまでゆゝしきことならず、古き字音
の仮名も、もろこしの音の姿を寫したるものにはあれど、も
ろこしの音の姿はいとさはにして、開斉合撮と折れまがりた
るに、みくにの音は少くしてすなほなれば、たゞおほよそを
写したりと覚し、おのれむかし第三高等学校にありしころ、
源氏の源はもとぐゑんなりきと、阪倉篤太郎大人のさとした
まひしが、げに愚袁切といふよりすれば、ぐゑんなるべし、
ざるをこの仮名いつかすたれて、前の仮名づかひにてもその
沙汰なし、また閉口の韻の侵覃塩咸もシムタムエムカムには
あらで、真単煙間とおしなみにシンタンエンカンなりき、前
の仮名づかひ知ればとて、唐音まなぶにさして便りよしとも

おもほえず、おのれ唐音をまなぶに仮名づかひにたよりしこ
となし、こは世の唐まなびするものにたゞしたまひても、お
ほかたは同じかるべし、

また古き仮名づかひすたりぬれば、みくにの古きふみ読む
にたよりあしく、古きふみ読むことおのづからおろそかにな
りゆかむとのおもんばかりあらむ、まことさもありなむに
は、これゆゝしきことなり、さはれ便りあしといふは、まこ
とにたよりあしきにや、よろづ言葉のさますでにおしうつり
ぬるに、仮名づかひのみ古きとなへさまに従ひてしたゝめぬ
とて、古きふみ読むこといとたやすかりなむや、上つ世のふ
み読むことかたしといはゞ、古き仮名づかひ守るともかた
く、たやすしといはゞ、古き仮名づかひ守らずとも、たやす
かりなむ、おのれひそかに思ふに、古きふみ読むことおろそ
かになりゆくは、仮名づかひの古き新しきにはかゝはらじ、
古き人の心のさまは古きふみ読みてこそ知るべきに、世の人
このことわりをさとらざるが故なり、鈴の屋の大人のさとし
ごとのごとく、およそ人の言と心と事とは相かなへるもの
に、古き心のめでたきは、しらべよき古き言の葉のうちにと
そあるに、今の世の人は、古きふみのたふとさを口にはとけ
ども、このことわりをさとらざるが故に、あらそひ読むは
何々の研究しかくの論と、すべて古きふみのたゞおほよそ
をこちたく、今の言葉にいひかへたるもののみにて、古きふ

みをそのままに読むわざは、なか／＼におろそかになりぬ、まづ改むべきはこの習ひにこそ、この習ひまづ改まりぬれば、たとひおのが言の葉は今となへさまのまゝにしたゝむとも、古きふみ読むことすたるべしやは、またかくて古きふみのうちにて古き仮名づかひをさとらば、たとひ上つ世の人のごとくなふることはかなはずとも、上つ世のとなへさまはかくこそありつれと、深く心にしみてさとりなむ、かゝるすぢよりいはず、おのれはわらべたちの習ふわざにも、ふるき文さし加へたく思ふなり、今のわらべたちの習ふわざのすべて今の人のおふみのみなるぞ心得ぬ、なかにはいにしへごとをときたるもあれど、それもみな今の人のおふみなるを、かくては古人のこゝろ知りがたくなむ、今のふみ一わたり修めたるうへは、古きふみ授けむこそよけれ、ことに歌は人の心をたねとして、ことばみじかく心ふかし、それにたやすきふみどもさし加へてさづけなば、いかばかりめでたかりなむ、そはむつかしきわざなりといふは、例のおとなたちのおしはかりなり、ふるきふみ書ける人はみな今の子らのおやにて、

今の子らはみなそのうまごなるに、すく／＼と伸びゆく若竹の、などさばかりのことにたわみてむや、小学校の国民学校と改まりぬるはよし、その八年に改まりぬるもよし、やまと歌の一つをもさづけずして、国民学校といふぞあやしき、

たゞこの道おこなはれむためには、みくじること定かにまな

びたる人あるべし、さるを世の学者のおほむねは世の中のならひになびきて、何がしの論しかぐの研究と、こちたき沙汰のみうるさきぞうたてき、ひとりわが西京の国学は、学士たちみな古きふみまめやかに読み、言葉にこもれる心のさまあきらむるをむねとし給ふ、いとたのもしくめでたくなむ、から文にいはいゆる中流の砥柱とやいはむ、あはれこの道あとしたえずば、仮名づかひ改まるとも何かはあらむ、唐うたに風雨凄凄、鷄鳴啾啾といへるに思ひあはせて、おのれ読みでたる歌にはあらねど、

風ふけばおきつ白浪たつた山

よはにや君がひとりこゆらむ